

アイコイル・モーター1

渡辺 満（静岡県）

§0 はじめに

これは、「奇跡のアイコイル1.pdf」の続きである。

今回は、これまでに得たフリーエネルギーに関する技術を、
モーターに応用する。

（モーターは、今回が初めてである。）

モーターを実際に作るには、精密加工が必要など、
自分でやるのは、むずかしい。

しかし、構想のみなら簡単なので、まず構想をまとめた。

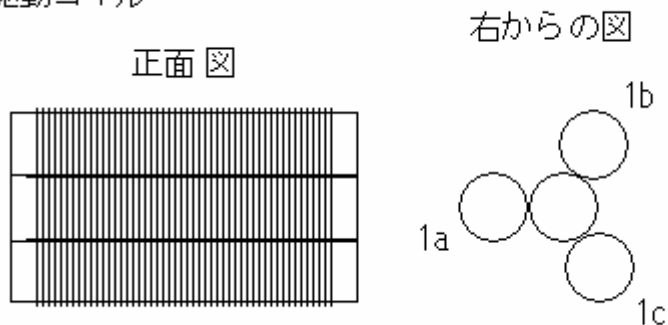
これから述べるモーターには、次の3つのフリーエネルギー効果が、
期待できる。

- 1) アイコイルによるアイ起電力
- 2) 磁束の衝突効果
- 3) コアによる力学的効果

3)は、今回初めて登場するもので、まだ実験による確認はできていないが、
理論的見地から、予想できるものである。

§1 駆動コイル及びローター

駆動コイル



直径数 cm のコアに、1500 回ぐらい巻いたコイルを、3 本用意する(1a,1b,1c)。

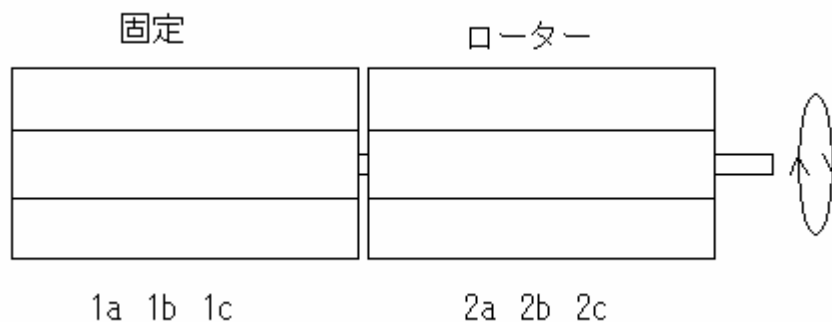
これが、駆動コイルであり、アイコイルになる。

この 3 本を、図のように、互いに 120 度離して配置する。

(中央の円は、作図上の都合によるもので、コイルではない。)

これを 2 組(1a,1b,1c/2a,2b,2c)作って、向かい合わせ、

片方を固定、他方をローターとする。



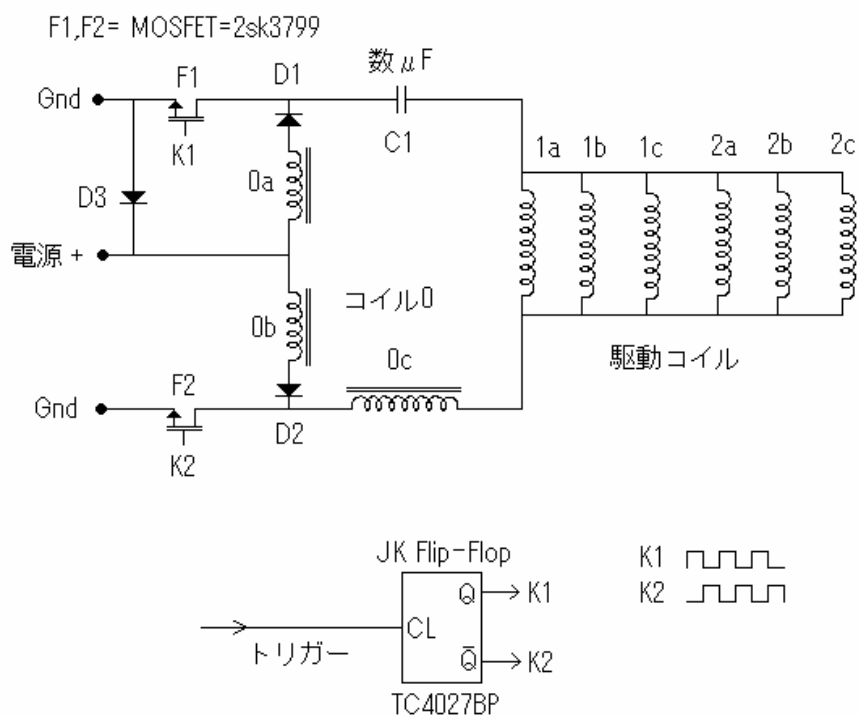
ローターは、左右のコイルの磁束の反発によって、回転する。

(ブラシが必要かもね。)

ここで、左右の磁束の衝突による、「磁束の衝突効果」が期待できる。

(効果が出れば、駆動コイルのパルス電流が、増幅される)

§ 2 回路



●コイル 0 (0a,0b,0c)

「奇跡のアイコイル1.pdf」と同様、コイル0は、パルス状の電流を、発生させるためのものである。コイル 0 は、「奇跡のアイコイル1.pdf」 のものと、同じコアを用い、0a,0b,0c も同じ巻き方をする。ただ、こちらの方が、周波数が小さいので、巻き数は、多くした方が、よいかもしれない。(電源電圧にもよるが・・・)

●完全スイッチング回路

この回路は、駆動コイルに入力するパルスを、より強くするために、考え出した回路である。

コイル0から出たパルス状電流は、駆動コイルを通るが、駆動コイルがアイコイルのため、このパルスは増幅される。この増幅を無駄にしないため、増幅されたパルスを、一端、コンデンサ C1 に蓄える。

整流ダイオード D1,D2,D3 の作用によって、
コンデンサ C1 の電荷は、K1,K2 の反転時、その瞬間のみ、
出入り可能である。

C1 は、蓄えた電荷を、パルス状に放出するが、(左右交互に)
これが、コイル 0 から出るパルスに合流して、
トータルでパルスが強くなる。

このモーターの回転数を、例えば、50 回転/秒 ぐらいとすると、
トリガーの周波数は 150Hz、と小さい。
これより、回路上の C1 は、かなり大きくできて、数 μF ぐらいか。

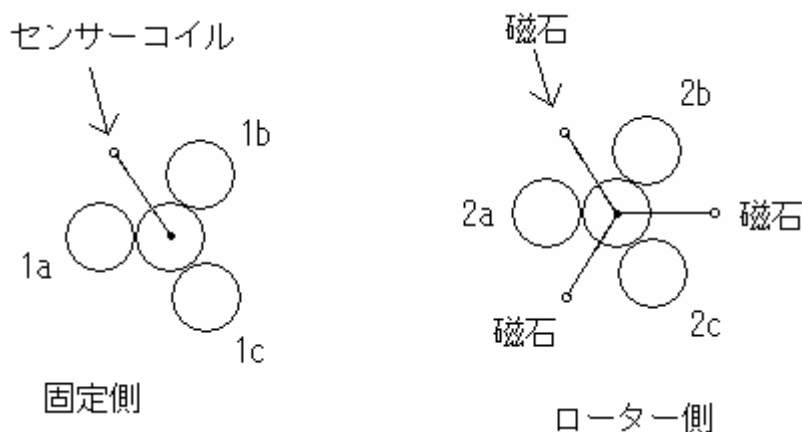
以前での実験で、この完全スイッチング回路は、
周波数が低いとき、非常に効果的に機能することが、わかっている。
だから、期待が大きくて、できれば、自分で作ってみたいと、思っている。
例えば、3D プリンターを使えば、プロトタイプぐらいは、
できるかもしれないが、状況的に、今はむずかしい。

これは、電力消費量が少なく、出力の大きいモーターになる。
うまくいけば、電気自動車に、使えるかもしれない。
読者で、これを実際に作りたいと思う人は、
前回のものを含めて、どんどん、自由にやるべし！

この完全スイッチング回路は、過去にすでに、
フリーエネルギーの発見4.pdf フリーエネルギー実現回路1.pdf
で用いている。
この2つの pdf に、電流の流れの詳細な図示があるので、
そちらを見られたい。

§3 トリガー発生

どのようにして、ローターを回転させるかという、
ローターが、ちょうどよい位置に来たところで、
位置センサーが反応し、センサーに連動して、トリガーが発生、
K1,K2 が反転して、パルスが駆動コイルに送られる。
すると、駆動コイルの左右が反発、結果的にローターが回転する。



どのようにして、位置センサーを実現するかという、
例えばだが、上図のように、ローター側に 3 個の小磁石、
固定側に、位置センサーとして、
その小磁石に反応する 1 個の小コイルを設ける・・・など。

● コアによる力学的効果

厳密に言えば・・・

コアを入れたコイルに伴う電磁的現象というのは、
コアの存在によって、Maxwell の方程式から外れてしまう、
枠外になるのである。

これに伴って、エネルギー保存則からも外れてしまう、可能性が出てくる。
次のような表現をしてみた。

・・・ このような感じ ...

「コアが勝手に力学的仕事をして、その報酬をコイルの電流に求めない。」
この力学的仕事というのが、ローターの回転である。

すなわち、ローターの回転が、発生したエネルギー、フリーエネルギーとなる。

2018年8月発行 V1

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2018年